



Title	Ibo族の仮面における色彩の象徴性
Author(s)	吉田, 憲司
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1983, 17, p. 21-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Ibo 族の仮面における色彩の象徴性

吉 田 憲 司

I. は じ め に

アフリカのギニア湾沿岸からコンゴ盆地にかけての一帯では、いたるところで仮面の存在が確認される。既存の研究によれば、この地域の多くの社会において、仮面の使用は重要な象徴的意味を帯びているという。しかしながら、それらの研究をふりかえてみると、そこにはいくつかの問題点を指摘せざるをえない。

そのひとつは、従来の研究が、仮面のもつ動的かつ複合的な性格を必ずしも十分に考慮してこなかったことである。仮面は衣装とともに身につけられ、舞踊や儀礼の中で一定の「ふり」と結びつけられることによって、はじめてその本来の機能を果たす。したがって、仮面の意味もまた、仮面が置かれたそのような複合的コンテキストの中でとらえられねばならない。

第2の問題点は、これまでの研究が個々の仮面と神話や伝承との対応を追究するあまり、仮面相互の關係に目を向けようとしなかったことである。仮面を共有する何らかの集団が、ただひとつ、あるいはただ1種類の仮面しか保有しないという例は、ほとんど知られていない。つまり、仮面は通例個として存在しているのではなく、形式を異にする複数の仮面からなる「セット」のかたちで存在しているのである。仮面が「セット」を構成する以上、仮面の意味もまた、その「セット」の構成原理、いかえれば仮面の分類体系を明らかにすることによって、はじめて把握されるものと考え

えられる。

もうひとつの問題点は、これまでの研究に仮面の「形態」の象徴性に関するものはみられても、「色彩」の象徴性に関する研究がみられない、という点である。仮面に限らず、造形芸術はすべて色と形からなるといわれる。目にみえる対象を、その形態と色彩とに区別してとらえるというわれわれの表象の特性からすれば、それは至極当然のことといってよい。しかも仮面の場合には、その大半が何らかのかたちで着色されている⁽¹⁾。そこでは形態と色彩との区別は、単に表象の問題に留まらず、成形と着色という仮面の制作段階の区別にも対応するものとなっている。したがって、従来の研究が形態の考察に傾き、色彩を等閑に付してきたことは、ひとつの方法論的欠陥であるといわざるをえない。

仮面は造形芸術の中でもとりわけ特異な存在である。それだけに、仮面の考察にあたっては、仮面の特異性に対する十分な配慮の必要性が痛感されるのである。

この小論は、ナイジェリアの Ibo 族の仮面舞踊をとりあげ、その象徴性を考察することを目的としている。そのさい、上で述べたような諸点に鑑みて、新たな角度からのアプローチを試みたい。それは同時に、仮面の研究、ひいては民族美術の研究に、ひとつの方法論を呈示することにもつながると思われる。

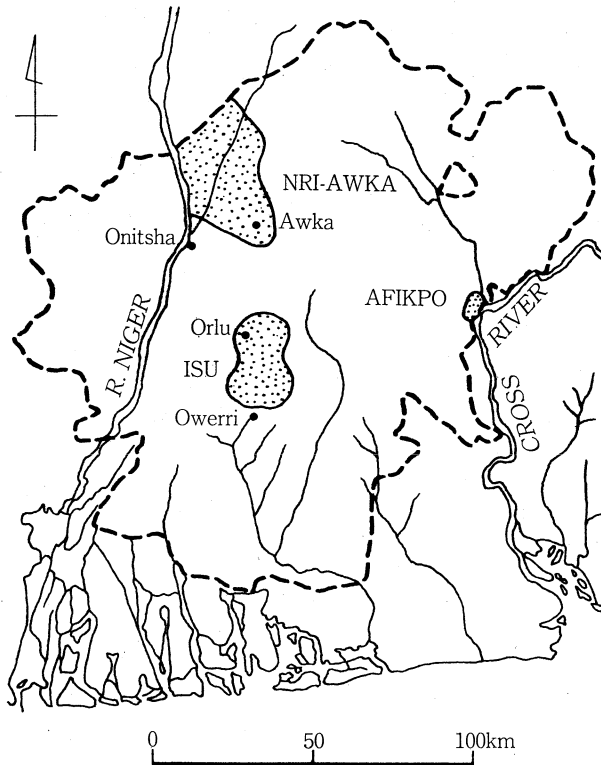
なお本稿は、いわゆる現地調査に基づいた報告ではない。Ibo 族に関しては、19世紀以来、多くの民族誌の蓄積がみられる。本稿でとりあげる諸事例も、もっぱらこれらの過去の民族誌に基づいたものである。

II. Ibo 族の仮面舞踊

本稿でとりあげる Ibo 族は、ナイジェリア南部に住む人口約1200万人⁽²⁾の言語集団である。Ibo 族といっても、この集団全体が政治的に統一され

ていたわけではない⁽³⁾。Ibo 族には、伝統的にムラを超えた範囲に及ぶ政治的権威は存在しなかった。そして仮面結社、つまり仮面舞踊を演じる集団もまた、ムラを単位に組織される。10歳前後に達したムラの男性は、全員この結社に加入する。

Ibo 族においては、仮面は isi ないし ihu とよばれる。いずれも第一義的には、人間の「顔」をさす語である。一方仮面を被った踊り手は、mmuo-uwa, あるいはより短く mmuo とよばれる。mmuo は「死霊」ないし「精霊」を意味する。uwa は「現世」の意である。このことからわ



Ibo ランド概念図

かるように、Ibo 族のあいだでは、仮面を被った踊り手は、死霊や精霊 (mmuo) が現実の世界 (uwa) に再生したものとみなされている。つまり死霊や精霊の化身とみなされているのである⁽⁴⁾。

ところで、ほぼ九州の面積に匹敵する広さをもつ Ibo ランドの内部では、地域によってかなりの文化的変異が認められる。仮面や仮面舞踊の形式もまた、その例外ではない。ここでは便宜的に、北部 (Nri-Awka 地域)、南部 (Isu 地域)、東部 (Afikpo 地域) の三つの地域をとりあげ、各地域の仮面舞踊を個別に検討していきたい。

1. 北部の仮面舞踊

J. S. BOSTON によれば、北部の Nri-Awka 地域一帯では、特定のムラにしかみられない仮面舞踊が多数存在する。その一方で、舞踊の形式およびそれに用いられる仮面の形式の上で、同地域全体に共通してみられる仮面舞踊が2種類存在する。BOSTON の分類に従えば、それは、(1) horned mask (角つき仮面) を用いる舞踊、(2) female mask (女の仮面) を用いる舞踊、の2者である [BOSTON, 1960: 56-64]。

(1) 「角つき仮面」を用いる舞踊

BOSTON のいう「角つき仮面」を被った踊り手は、Ibo では odugu mmuo-uwa (強い mmuo-uwa) ないし oke mmuo-uwa (男の mmuo-uwa) とよばれている。

「角つき仮面」は、その名の通り頭上に角の形象をもっている。また口のまわりには牙の形象をもつ。この種の仮面は、制作方法の違いから、さらにふたつのタイプに分けられる。ひとつは、籐製の枠組みにバッファローやアンテロープなどの実際の動物の角を固定し、上からガムで塗り固めたものである。いまひとつは、角や牙を含めて全体を1本の木から彫り出したものである(図1)。いずれにせよ、これらの仮面は、黒一色に彩色される。そして仮面とともに身に着けられる衣装にも、好んで黒く染めた布

が用いられる。

「角つき仮面」を被った踊り手は、祭りや葬儀のさいに単独で登場する。踊り手はナイフを手にして村中を練り歩き、各所で観衆に襲いかかるといふ。

(2) 「女の仮面」を用いる舞踊

一方 BOSTON が「女の仮面」と命名した仮面を被った踊り手は、Ibo 族のあいだで、agbo mmuo-uwa (少女の mmuo-uwa) あるいは mmuo-uwa ogbegu (踊る mmuo-uwa) とよばれている。

「女の仮面」は人間の顔を象ったものである(図 2)。仮面の頭部には、特異な形態をもった頂飾りがついている。この部分は、黒のほか白や赤や黄色を用いて彩色される。これは Ibo 族の女性の伝統的な髪型を誇張して表現したものとされている。仮面の面部は白で彩色される。また鼻梁から額にかけて、1 本の黒い線が縦に伸びる。こうした特徴はすべての「女の仮面」に共通したものである。この種の仮面とともに、赤や黄色を多用した華美な衣装が用いられる。

「女の仮面」を被った踊り手は、つねに集団で登場する。踊り手たちは列を組み、円を描くように回転する。この集団舞踊の形式は Ibo 族の女性の舞踊をまねたものである。舞踊のあいまには、同じ仮面を被った踊り手が寸劇を披露する。これは女性の日常生活を描写したものであるという。

ここで「角つき仮面」と「女の仮面」とを見比べてみると、両者がいくつかの点で明瞭な対照を示していることがみてとれる。すなわちこの両者のあいだには、名称の上で〈男／女〉、形態の上で〈動物／人間〉、色彩の上で〈黒／白〉、そして踊り手の行動様式の上で〈単独性／集団性〉〈攻撃性／非攻撃性〉といった対立が認められるのである。

2. 南部の仮面舞踊

南部の仮面舞踊については、これまでのところ詳細な報告がみられない。

わずかに H. M. COLE が、okorosia という仮面舞踊に言及しているのみである [COLE, 1969]。okorosia とは、同地域で崇拝されている精霊の名である。仮面舞踊はこの精霊の慰撫のために催される。

COLE によれば、okorosia に登場する仮面は、現地の人々によって大きくふたつのカテゴリーに分類されているという。すなわち、okorosia nma と okorosia ojo とに、である。nma は「善・美」を意味し、ojo は「悪・醜」を意味する [COLE, 1969: 37]。善悪の道徳的価値と美醜の美的価値とが用語上区別されないのは、アフリカの言語に広くみられる現象である。

図3は、okorosia nma、つまり「善・美なる okorosia」の例である。この仮面は、卵形の輪郭をもつ。輪郭線の内側には、これと接する菱形の造形がみられる。この部分が面部となる。面部は、北部の「女の仮面」同様白く彩色されている。鼻梁から額にかけて1本の黒線が走るのも「女の仮面」と共通するものである。また目尻から耳にかけても、黒線が横に入っている。この2本の黒線は、面部の菱形の対角線と一致するものであり、この結果、仮面全体の幾何学性、左右対称性が強調されている。「女の仮面」と異なり、この仮面では頂飾りはみられない。ただし仮面の周縁部に、赤と黄色で彩色された装飾浮き彫りが配されている。

次に図4は、okorosia ojo「悪・醜なる okorosia」の例である。この仮面は、小型ながら角や牙の形象をもち、全体が黒く彩色されている。これらの特徴は、北部の「角つき仮面」と共通する。ただし、この仮面の場合、「角つき仮面」よりはるかに自然主義的なモデリングが施されている。

図5は、「悪・醜なる okorosia」のもうひとつの例である。この例では、角はみられない。眼窩が著しく落ち込み、鼻も欠けているため、この仮面は一見頭蓋骨を思わせる。しかしこれらは、熱帯病の症状と一致するものとされている⁽⁵⁾。さらにこの仮面では、2本の牙が別々の方向を向いて突出しており、左右の対称性が意識的に崩されている。色彩については、剥

落が激しいものの、いたるところに黒い彩色のあとが残っている。このことから、もともと仮面全体が黒一色に塗りつぶされていたことが窺える。

残念ながら、これらの仮面の個々の名称は不明である。しかし COLE によれば、「悪・醜なる okorosia」には、「毒を入れる壺」「毒へび」「鋭い鉤針」「骨食い」など、攻撃性や反社会性を連想させる名をもつ仮面が含まれる。一方「善・美なる okorosia」には、「少女」「母親」「ダイサギ」「虹の首」といった名の仮面が含まれる。このうち「虹の首」とは、首に肉がついて何段にも盛り上がった状態をさす。これは Ibo 族のあいだで、美しい女性のバロメーターとされているものである [COLE, 1969: 38]。いずれにせよ、「善・美なる okorosia」は女性と密接に結びついている。

さて以上に述べた2種類の仮面は、祭りの期間中1日交代で登場し、最終日にはじめて一堂に会するという。このことは、okorosia の仮面舞踊が、二元論的な原理に基づいて構成されていることを示すものにほかならない。

確かに okorosia nma と okorosia ojo とのあいだには、北部でみたのと同様の対立関係が指摘できる。まず、カテゴリー名に関して〈善・美／悪・醜〉という対立があるのはいうまでもない。次に色彩の上で〈白／黒〉、形態の上で〈人間／動物〉〈左右対称／左右非対称〉という対立が認められる。残念ながら、それぞれの舞踊の詳しい内容は報告されていない。しかし少なくとも仮面の名称から、この両者のあいだに〈社会性／反社会性〉〈穏和な性格／攻撃的な性格〉という対立があることは指摘できる。なおここでは、北部でみたような仮面の名称の上での〈女／男〉の対立は認められない。COLE はこのような対立関係を指して、「美女と野獣」とよんでいる。

3. 東部 Afikpo の仮面舞踊

東部に関しては、とくに Afikpo 地域の仮面舞踊について、S. OTTENBERG による詳細な報告がなされている [OTTENBERG, 1975]。それによれ

ば、Afikpo では多種多様な仮面舞踊が催されるという。中でももっとも大規模なものが、okumkpa⁽⁶⁾とよばれる祭典である。

(1) okumkpa

okumkpa は、定期的に行なわれるものではない。いわば、不定期に行なわれる仮面舞踊大会、それが okumkpa である。okumkpa では、集団舞踊と風刺劇とが交代でくり返される。全体としてこの祭典は、8ないし9の場面から構成される。

まず集団舞踊は、北部でみたのと同じ、女性の舞踊をまねたものである(図6)。この舞踊を演じる者たちは、akparakpa と総称される。彼らが着用するのは、mba, opa nwa, mma ji といった仮面である。

mba (図7) は、Afikpo においてもっとも数多く使用される仮面のひとつである。この仮面は女性をあらわしたものとされる。その特徴は、卵形の本体の上に板状の頂飾りをもつことである。頂飾りには、赤や黄色で幾何学文が施される。一方本体部分は頭部が黒、面部が白で彩色されている。鼻梁から額にかけて黒い正中線があらわされる。こうした面部の形式は、基本的に北部の「女の仮面」や南部の「善・美なる okorosia」と共通するものである。

opa nwa (図8) は、mba を基本に、より多くの装飾を施した仮面である。opa nwa とは「子供を載せる」の意である。その名のとおりに、この仮面は頭上に人像を頂くのを特徴とする。opa nwa はまた、現地の人々から“queen's mask”とよばれ、もっとも美しい仮面として賞讃されている。

akparakpa の踊り手たちが多用するいまひとつの仮面が、mma ji である(図9)。mma ji とは「ナイフ」を意味する。この名称は、仮面の頂飾りがナイフの形態に似ているところからつけられたものである。しかしこの仮面が本来何をあらわしたものは、結社の成員にも知られていない。彼らはただこの仮面が「鳥のようにみえる」というのみである。

このように、akparakpa の踊り手たちが被る仮面は、それぞれに形態を異にしている。ただしこれらの仮面は、いずれも白を基調に彩色され、また Afikpo の人々から「美しい」あるいは「よい」と評価されている。

一方、風刺劇を演じる者たちは ori とよばれる。ori は、南部でいうところの ojo にあたる語であり、「悪・醜」を意味する。ここにいう風刺劇とは、村の長老たちの私利・私欲にからんだ悪事をとりあげ、それを仮面を被った演者が歌にあわせて再現してみせるものである。当然劇中の登場人物は、実在の村人をあらわすことになる。この劇では、原則として演者の全員が okpesu umuruma 「子おどし」とよばれる仮面を用いる。この仮面はまた、ihu ori 「醜い(悪い)顔」ともよばれている(図10)。

この種の仮面の最大の特徴は、全体が黒く彩色されていることである。形態についていえば、頂飾りはなく、全体が卵形を呈している。また目や口がゆがみ、左右非対称の造形を施されたものが数多くみられる。これは先述のように熱帯病の症状をあらわしたものと考えられる。ただし OTTENBERG は、肉体的な病と同時に社会的な病をあらわすものと解している [OTTENBERG, 1975: 48]。それは、これらの仮面が長老の貪欲さなど社会的な悪の元凶をあらわすのに用いられるからである。なおこのような仮面を被った踊り手は、風刺劇ばかりでなく、okumkpa のいくつかの場面において単独で舞踊を披露する。

以上のことから、akparakpa の踊り手たちと ori の演者とのあいだに、明瞭な対立関係が存在していることが看取される。すなわち、akparakpa の踊り手たちが相対的に〈白い仮面〉を用いるのに対し、ori の演者は〈黒い仮面〉を着用する。前者の仮面は一般に〈善・美〉と賞讃され、後者の仮面は〈醜い(悪い)顔〉の異名をもつ。仮面の形態の上では、前者の〈左右対称性〉と後者の〈左右非対称性〉が対立する。そして舞踊の様式の点で前者の〈集団性〉と後者の〈単独性〉が対立する。最後に、前者が風刺

劇と無関係であるのに対し、後者は社会風刺の直接の対象となる。そこにあるのは〈社会性／反社会性〉の対立である。

(2) njenji パレード

同様の対立は、njenji とよばれる仮面のパレードにおいても確認される。このパレードは、Afikpo の新年祭 (iko okori) の一環として行なわれるものである。

njenji パレードのさいに行列を組んで行進するのは、白い仮面を被った者に限られる。まず行列の最前部には、opa nwa の仮面(図8)を被った者たちが体に赤や黄色の布を巻いて行進する(図11)。これは未婚女性の儀礼用のいでたちをあらわしたものとされている。その後方には、mma ji (図9)をはじめ多様な仮面を被った者たちが、貫頭衣やワンピースを身に着けて行進する(図12)。これらはイスラム教徒や白人など、現代の Afikpo 社会における男女の姿を描写したものである。

ところで njenji パレードのさいには、こうした行列本体とは別に、okpesu umuruma の仮面(図10)を被った踊り手が1人か2人登場する。彼らは行列の前後をうろつきまわり、ときおり奇怪な動きをみせる。これはかつて奴隷狩りで Afikpo 社会に大きな打撃を与えた奴隷商人をあらわしたものである。

ここでもわれわれは、行列を組む白い仮面と、奴隷商人に扮した黒い仮面のあいだに〈集団性／単独性〉〈社会性／反社会性〉という対立をみることができるのである。

(3) logholo

Afikpo においては、少年たちと仮面を被った結社の成員とのあいだでしばしば格闘試合が行なわれる。この試合に仮面をつけて登場する演者は、一般に logholo とよばれている。

logholo は、mba(図7)、opa nwa(図8)をはじめ、山羊を象ったもの

とされる mkpe「角」(図13)、それに otogho「キツツキ」(図14)といった仮面を用いる。このうち、mba, opa nwa, mkpe の仮面を被った者は、つねに防御にまわり、子供たちの手でたたき伏せられることもある。これに対して otogho の仮面を被った者は、力強く、かつすばしこいとされている。

もとより演者の性格や体力が演技の内容を大きく規定しているのは事実である。しかし重要なことは、力の弱い演者が被る仮面がつねに白を基調に彩色され、一方力の強い演者の仮面が黒を基調に彩色されていることである。ここでもまた、白い仮面と黒い仮面のあいだに〈非攻撃性(防御性)／攻撃性〉〈弱／強〉といった対立が認められる。

III. Ibo 族の仮面舞踊の諸特徴

以上、Ibo ランド各地の仮面舞踊を概観してきた。ここでその特徴を整理しておきたい。

a. 宗教性と世俗性

Ibo 族において、仮面を被った踊り手は、死霊もしくは精霊の化身とみなされている。その反面、実際の舞踊の場では、個々の踊り手は実在の村人をあらわしていたり、白人をあらわしていたりする。一般に Ibo 族の仮面舞踊では、宗教性よりも世俗性が強調される。

b. 仮面の多義性

Ibo 族、とくに Afikpo においては、ひとつの仮面がしばしば多目的に使用される。たとえば、「鳥のような」形態をもった mma ji の仮面は、okumkpa では Ibo 族の女性をあらわし、njenji パレードでは白人やイスラム教徒をあらわす。また okpesu umuruma の仮面は、風刺劇では実在の村人をあらわすのに用いられ、njenji パレードでは奴隷商人をあらわすのに用いられる。このようなところでは、個々の仮面が何をあらわすかを、仮面の形態から一義的に判断することは不可能である。それはただ、仮面

が用いられるコンテキストによって決定されるだけである。

もちろん、Ibo 族の仮面の中には、表現対象とのあいだに一定の相似性をもった例もみうけられる。たとえば北部において、「女の仮面」は女性を描写する以外には用いられない。また野生動物の角をもった「角つき仮面」は、野性的な荒々しい動きをみせる。しかしながら、これらの例においても、仮面の形態だけからその表現対象を特定することは困難である。

「女の仮面」は集団舞踊で不特定の女性をあらわす反面、寸劇では特定の性格をもった女性をあらわす。「角つき仮面」にしても、野生動物の擬態を演じるわけではない。それらの仮面が何をあらわすかは、最終的にはやはり、舞踊に伴うその都度の歌や詩句によって理解されるのである。

c. 仮面舞踊の2元論的構成

Ibo 族の仮面舞踊は、形式の上でも内容の上でも多様である。しかしそれらの舞踊は、つねに2組の仮面の対立によって構成される。すなわち、北部における「女の仮面」と「角つき仮面」の対立、南部における okorosia nma と okorosia ojo の対立、そして東部 Afikpo における「白い仮面」と「黒い仮面」の対立、である。

2組の仮面のあいだの対立は、三つの地域ではほぼ共通した性格を示している。それを整理したのが以下の表である。この表では、北部の「女の仮

表1 仮面舞踊の二元論的構成

	A	B	
仮面の色彩	白	黒	
仮面の形態	美女	野獣	(北部・南部)
	左右対称	左右非対称	(東部 Afikpo)
仮面の評価	善・美	悪・醜	
演者の行動様式	集団性	単独性	
	社会性	反社会性	
	非攻撃性	攻撃性	
	弱	強	

面」, 南部の okorosia nma, Afikpo の「白い仮面」をA群, 北部の「角つき仮面」, 南部の okorosia ojo, Afikpo の「黒い仮面」をB群, として総括してある。

この表からもわかるとおり, A群の仮面は善・美と評価され, 一貫して集団性や非攻撃性を示す。一方B群の仮面は悪・醜と評価され, 単独性や攻撃性を示す。こうした仮面の美醜の評価や演者の行動様式の違いに対応して, 仮面の形態や色彩にも違いがみられる。

A群の仮面は, すべて白を基調に彩色されている。一方B群の仮面は, すべて黒を基調に彩色されている。仮面の色彩は, このように仮面の美醜の評価や演者の行動様式の違いと対応して, 一貫した対立を形成している。

これに対して, 仮面の形態についてそうした一貫性を見出すことは難しい。確かに, A群の仮面とB群の仮面は, 〈美女／野獣〉という形態上の対立を示すことが多い。しかしながら, Afikpo においては, むしろ〈左右対称の人面／左右非対称の人面〉という対立を示すことが多いのである。

その点からすれば, 仮面の美醜の評価や演者の行動様式の違いと対応しているのは, 仮面の形態の区別ではなく, 仮面の色彩の区別であるといわねばならない。Ibo 族の仮面舞踊における仮面の分類は, 形態ではなく, 色彩に基づいてなされていると考えられる。

なお, 色彩による仮面の分類に関して, もうひとつ付言しておくべきことがある。それは白い仮面が往々にして赤や黄色で付加的に彩色され, 赤や黄色の衣装と併用されるのに対し, 黒い仮面にはそのような現象がみられないことである。以下では, このような点も含め, 仮面における色彩の使用が如何なる意味を担っているのかについて, さらに考察を進めたい。

IV. 仮面における色彩の象徴性

1. 仮面における白と黒の象徴性

いま一度、表1をふりかえってみたい。この表を縦に読んで気づくのは、白い仮面と黒い仮面の各々に対応する諸項のあいだに、統一性が認められることである。

すなわち、白い仮面は善・美と評価され、左右対称の造形をもち、さらには集団性や社会性や非攻撃性を示す。それは一言でいえば、あらゆる点で「秩序」を具現するものといってよい。一方、黒い仮面は悪・醜と評価され、左右非対称の異形性を特徴とし、単独性や反社会性や攻撃性を示している。それはあらゆる点で「無秩序」を具体的に表現したものである。したがって、白い仮面と黒い仮面とは、それらが個々の舞踊で表現する対象とは別に、それぞれ「秩序」と「無秩序」の象徴ということが可能である。

ここで想起すべきは、Ibo 族において仮面を被った踊り手が死霊ないし精霊の化身とみなされていたことである。

死霊とは、文字どおり人間の死者の霊である。死霊はさらに *ndi mmuo* (祖霊) と *oyo mmuo* (悪霊) とに分けられる。このうち祖霊というのは、正常な死に方をし、正式に埋葬された者の霊をさす。こうした霊は将来この世に再生してくると信じられている。これに対し、子孫を残さずに死んだ者や、処刑や伝染病によって死に至った者は、悪霊になるといわれる。かつてはそのような死者の遺体はブッシュに放擲されたという。悪霊は再生することもできず、生者に災厄をもたらすものとして恐れられる。

一方精霊は、この世界の事物に宿る霊的存在として認識される。精霊は、あるときは人間に福利をもたらし、またあるときは人間に災厄をもたらすものとされている。その意味で、精霊は本質的に両義的な存在である。

これらの死霊や精霊はすべて創造神 *Chi-ukwu* の代理者と考えられている。このため、死霊と精霊との区別はしばしば曖昧なものとなる⁽⁷⁾。しかしいずれにせよ、死霊や精霊が、福利をもたらす側面と災厄をもたらす

側面とをもつことに変わりはない。

先にも述べたように、仮面を被った踊り手は、死霊ないし精霊の化身とされる。その点からいうならば、「秩序」を具現する白い仮面は、死霊や精霊の福利をもたらす側面と対応し、「無秩序」を具現する黒い仮面は、死霊や精霊の災厄をもたらす側面と対応する、といえるであろう。Ibo 族においては、世俗の「秩序」と「無秩序」は、超人間的な存在との関連においてとらえられる。彼らにとって、舞踊における「秩序・無秩序」と死霊や精霊の世界における「秩序・無秩序」とは、表裏一体のものなのである。

2. 色彩のダイナミズム

これまでわれわれは、仮面の色を区別するのに「白い仮面」「黒い仮面」という言葉を用いてきた。しかし仮面の彩色に、白と黒の2色だけが使用されるわけではない。それ以外にも赤と黄色が使用される。その意味では、仮面の色の白と黒の区別はあくまでも相対的なものであり、より厳密には「明」と「暗」というべきかもしれない。

この点に関連して、次のような ARDENER の報告が注目される。彼によれば、Ibo 語において基礎色彩語彙として認められるのは、ocha (白) と ojii (黒) の2語だけである。しかもこの両者は、より広くは相対的な「明」と「暗」とを意味するという。この場合、基礎色彩語彙というのは、具体的な指示物をもたず、抽象的に色彩だけをさし示す語のことである [ARDENER, 1954: 71]。

もとより Ibo 語にも、赤や黄色や青を指示する語彙は存在する。しかしそれらはすべて、その色を呈する物質名を色名としたものである。そうした色彩を含めて、外界の色彩はこの ocha と ojii というふたつのカテゴリーに包含されてしまうのである。仮面の色彩の区別の相対性は、このような色彩語彙の相対性、いいかえれば Ibo 族の色彩認知の相対性と基本的に

パラレルであるといえる。

ARDENER はさらに続けて、ocha (白) は「浄らかさ」や「滑らかさ」をも意味し、「善」や「美」を意味する nma と同義的に扱われると述べている。彼はまた、ocha には「弱さ」の連想が含まれることも報告している。一方 ojii (黒) は、これと正反対の意味内容をもつという [ARDENER, 1957: 71-2]。ARDENER のこのような指摘は、仮面舞踊の分析を通じてわれわれが得た結論を、言語の側から裏づけるものとなっている。

色彩語彙ばかりでなく、白と黒という色彩自体の象徴性についてみても、興味深い事実が浮かびあがる^⑧。Ibo 族のあいだでは、人々は毒や敵の攻撃から身を守るために、体や護符に白い顔料を塗りつける。また裁判で勝訴した者の体にも、白い顔料が塗布される。白はさらに浄化儀礼で多用される。これらの例から、白が「浄らかさ」や「善」や「防御性」などと結びつき、つねに「秩序」ある状態との関連で使用されることが窺える。一方黒は喪服の色であり、殺人や盗みに効力を発揮する呪薬の色である。黒は「ケガレ」や「邪悪さ」や「攻撃性」と結びつき、「無秩序」な状態との関連で使用されるのである。

このように、白と黒の象徴性は、仮面舞踊の中で白い仮面と黒い仮面が示す性格と軌を一にしている。仮面の色彩が仮面の評価や舞踊の様式と対応するのは、このような色彩自体の象徴性に裏づけられたものといえるであらう。

ところで、仮面は白と黒だけで塗られるわけではない。仮面には同時に赤と黄色が用いられる。ただし赤や黄色が付加されるのは、通例白い仮面に限られる。同様に、赤や黄色の衣装を身につけるのも、白い仮面を被った演者に限られる。このことは、仮面にみられる赤や黄色と、衣装にみられる赤や黄色が、同じ原理に基づいて使用されていることを物語るものと思われる。

白い仮面とともに用いられる赤や黄色の衣装については、BASDENの報告の中に注目すべき記述がみえる。すなわち、そのような衣装は、結婚を控えた少女が nkpu とよばれる儀礼にさいして全身に施す赤いボディ・ペインティングをまねたものであるという [BASDEN, 1938: 367]。

Ibo 族のあいだでは、結婚を控えた少女のほかにも、出産後の体力回復期にある母親や、戦士の体に、赤または黄色の顔料を塗布するという慣習がみられる。また千里眼を得るための儀礼においても、受礼者の目のまわりが黄色に塗られる⁽⁹⁾。これらの事例から、赤や黄色が、性的能力や体力、さらには戦闘能力や視力など、何らかの「力」を強化するのに役立つと信じられていることが窺われる。

赤や黄色の衣装が赤いボディ・ペインティングをまねたものとされる以上、それが白い仮面とともに用いられるのは、白い仮面ないし白い仮面を被った踊り手に何らかの「力」を付与しようとするものと考えられる。白い仮面の上に赤や黄色が付加されるのもまた、同様の目的をもつものといえるであろう⁽¹⁰⁾。

前節で述べたように、白い仮面は世俗の「秩序」を象徴し、死霊や精霊の「秩序」をもたらす側面を象徴する。白い仮面に赤や黄色を付加することは、そのまま死霊や精霊の「秩序」をもたらす側面に「力」を付与することを意味している。それは同時に世俗の「秩序」を強化することをも意味するのである。

仮面は、白と黒という色彩を用いて、Ibo 族の世界を左右する「秩序」と「無秩序」という相矛盾する原理を提示する。さらに仮面は、「秩序」の側に「力」を付与することによって、世界を「秩序」ある状態に導こうとする志向をもっている。いいかえれば、Ibo 族にとって色を帯びた仮面は、単に価値の表現手段であるに留まらず、新たな世界をつくり出す原動力となっているのである。そこにあるのは、一種の弁証法といってよいか

もしれない。

V. 結 び

われわれはこの小論において、Ibo 族の仮面舞踊を仮面の形態と色彩との両面から考察してきた。Ibo 族の仮面舞踊の最大の特徴は、仮面の分類体系が、形態ではなく、色彩に基づいて構成されていることである。しかもそのようにして形成された仮面の体系は、すでにみたような宇宙論的な意味をすら担っている。一見世俗的にみえる Ibo 族の仮面舞踊も、仮面が色を帯びることによって深い宗教性を宿していたといえるであろう。

もとより、仮面の分類体系がつねに色彩に基づいているというつもりはない。形態に基づいた分類体系を有する仮面舞踊も数多く存在するに違いない。いずれにせよ、筆者の目ざすところは、具体的な造形を手がかりとして、それを生み出した人々の思考様式を探ることにある。仮面の分類体系が重視されるのは、それが個々の民族の思考様式と密接に結びついていると考えられるからである。

注

- (1) 梅棹・木村編、『仮面』には、世界各地の仮面、計353点の図版が収められている。そのうち着色の有無が確認できるものは310点。さらにその中で何らかのかたちで着色されたものは304点であった。したがって、着色率は、98.0%。
- (2) 外務省中近東アフリカ局、『アフリカ便覧』（1983）に基づき算定。
- (3) したがって、本稿では便宜的に Ibo 族という語を用いるが、厳密にはそれは、Ibo (Igbo) Speaking Group とよぶべきものである。
- (4) BOSTON [1960: 56], COLE [1966: 36], OTTENBERG [1975: 11], HENDERSON [1972: 110] による。ただし、著者により、mmuo は、mma [OTTENBERG, 1975], maw [BASDEN, 1938], mmo [BOSTON, 1960], mmo [FORDE and JONES, 1950] などと表記される。また mmuo-uwa も、BOSTON [1960] の表記では mma_g となっている。本稿では表記の統一の必要上、COLE [1969] と HENDERSON [1972] にならった。

- (5) イチゴ腫 (Frambesia) の第3期症状とされ、Gangosa とよばれる (cf. Simmons, 1957)。
- (6) OTTENBERG [1975] の表記では、okumkpa は ɔkumkpa となっている。以下、OTTENBERG によって、ɔpa nwa, ɔri, ɔkpesu umuruma, ɔtogho と表記された方名に関して、本稿ではすべて [ɔ] を [o] と表記した。
- (7) 以上、死霊と精霊に関する記述は、主として HENDERSON [1972: 105-25] によった。
- (8) Ibo 族における色彩使用の象徴性に関する詳細な考察は、別の機会に譲りたい。ここではその結論を述べるに留める。
- (9) Ibo 族において、赤と黄色は、儀礼的文脈の中では同一視される。
- (10) 注9参照。したがって、仮面の上にみられる赤と黄色の区別は、彫刻師の手に委ねられた純粋にデザイン上の工夫である。

《文 献》

本文および注で略記した文献は以下のとおり。なお、文献を略記する場合、[] の中は、[著者名, 刊行年次: 引用ページ数] の順で記載されている。

ARDENER, E. W.: "Some Ibo Attitude to Skin Pigmentation", *Man*, 54 (art. 101), (1954), pp. 71-73.

BASDEN, G. T.: *Niger Ibo*, (London), 1938 (1966).

BOSTON, J. S.: "Some Northern Ibo Masquerades", *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 90, (1960), pp. 29-54.

COLE, Herbert M.: "Art as a Verb in Iboland", *African Art*, 3 (1), (1969), pp. 34-41, 88.

FORDE, D. and G. I. JONES.: *The Ibo and Ibibio-Speaking Peoples of South-Eastern Nigeria*, (London), 1950.

HENDERSON, R. N.: *The King in Every Man*, (New Haven and London), 1972.

OTTENBERG, Simon: *Masked Rituals of Afikpo*, (Seattle and London), 1975.

SIMMONS, Donald C.: "The Depiction of Gangosa on Efik-Ibibio Masks", *Man*, 57, (1957), pp. 17-20.

梅棹忠夫・木村重信(監修), 『仮面』, (講談社) 1981.

図版

1. Horned mask. Wood, H. 61cm., National Museum (Lagos), 20th century.
(Ekpo EYO, *Two Thousand Years Nigerian Art*, Lagos, 1977, p. 205.)
2. 「女の仮面」, 木製, 33×18cm, (梅棹忠夫・木村重信監修, 『仮面』, 講談社, 1981, 図39)
3. Okorosia nma. (H. M. COLE, "Art as a Verb in Iboland", *African Art*, 3(1), 1969, p. 37.)
4. Okorosia ojo. (H. M. COLE, *ibid.*)
5. Okorosia ojo. (H. M. COLE, *ibid.*)
6. Akparakpa dancers. (S. OTTENBERG, *Masked Rituals of Afikpo*, Seattle and London, 1975, pl. XI)
7. Mba. Wood, 1952-3. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. III)
8. Opa nwa. Wood, 1952-3. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. VII)
9. Mma ji. Wood, 1959-60. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. IV)
10. Okpesu umuruma. Wood, 1952-3. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. VI)
11. Njenji parade. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. XII)
12. Njenji Parade. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. XII)
13. Mkpe. Wood, 1952-53. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. VII)
14. Otogho. Wood 1952-3. (S. OTTENBERG, *ibid.*, pl. II)